

《書 評》

A. Smith (ed.), *The Philosopher and Society in Late Antiquity: Essays in Honour of Peter Brown.*

The Classical Press of Wales, Swansea, 2005, pp.xiv + 249.

西 村 昌 洋

1

この論文集は、ピーター・ブラウンを記念して、ダブリン、ユニヴァーシティ・カレッジで開かれたカンファレンスをもとにして作成されたものである。カンファレンスの目的は、古代末期における哲学者の社会との関わりを論ずるために、現代の哲学者と歴史学者を一堂に集めることだったという (p.vii)。この書が扱う哲学者は主に、プロティノス、イアンブリコス、プロクロスといった新プラトン主義の哲学者となる。論文寄稿者たちは概して、一般的に超世俗的・脱世俗的傾向が強いとされる新プラトン主義者たちが周囲の社会から遊離しきってはいないこと、そして、キリスト教会の影響力が大きくなるにつれて、彼ら異教徒の哲学者が緊張に晒され周縁に追いやられていくことを描き出す。

副題に名前があがっているように、この書の論者たちに示唆を与えたのがピーター・ブラウンの研究とされている。ただし、論者の一人一人が具体的にブラウンのどの研究を下敷きにしているのかは必ずしも明示されていない。本文中ではLane Foxのみが、古代末期社会における哲学者についてのブラウンの見解をまとめている (pp.20 - 22)。それは、*Power and Persuasion in Late Antiquity: Towards a Christian Empire*. Madison, 1992におけるものであり、古代末期における哲学者についてのブラウンの主張は以下のように要約できる。帝政期において、哲学者はパトロネジや友誼関係に縛られない社会から自由な存在、権力者と対峙し得る存在としてみなされていた。古代末期にもこのイメージは残っており、自由に意見を口にすること、*παρρησία*をローカル・エリートに代わりに担う者として、自らの怒りを制しまた権力者の怒りも鎮める存在として意識された。一方では社会から自由で観想を重んじるとされ、他方では説得する能力、皇帝やその側近と交渉する能力を期待される、後4世紀の哲学者イメージは二面的である。後期帝政期の政策にまつわる同時代人のイメージにおいて、皇帝の心を宥める者としての哲学者像は重要だった。しかし、この役割の担い手は徐々にキリスト教会の指導者や聖人に移っていく¹⁾。この論文集の論者たちは概ね以上のような観点を出発点としているようだ。

2

本書に収録された各論考は以下のようになっている。

1. Philosophy as a profession in late antiquity (John Dillon)
2. Movers and Shakers (Robin Lane Fox)
3. The social concern of the Plotinian sage (Alexandrine Schniewind)
4. Action and contemplation in Plotinus (Andrew Smith)
5. Man and daimones: do the daimones influence man's life? (Karin Alt)
6. A Neoplatonist ethics for high-level officials: Sopatros' Letter to Himerios (Dominic J. O'Meara)
7. Live unnoticed! The invisible Neoplatonic politician (Robbert van den Berg)
8. Apamea and the Chaldaean Oracles: A holy city and a holy book (Polymnia Athanassiadi)
9. Sages, cities and temples: Aspects of late antique pythagorism? (Garth Fowden)
10. Asceticism and administration in the life of St John Chrysostom (Aideen Hartney)
11. Where Greeks and Christians meet: Two incidents in Panopolis and Gaza (Mark Edwards)
12. Divine names and sordid deals in Ammonius' Alexandria (Richard Sorabji)
13. An Alexandrian Christian response to fifth-century Neoplatonic influence (Edward Watts)
14. Appendix: Harran, the Sabians and the late Platonist 'movers' (Robin Lane Fox)

ここからは各論考の紹介に移るが、紙幅の都合から評者自身の関心に引き寄せ、次のように大まかに二つのグループに分けた上で内容をまとめようと思う。一方は、哲学者と社会との関係を主に扱ったもので、Dillon, Lane Fox, O'Meara, van den Berg, Fowdenらの論考がこれに当たる。もう一方は、異教徒の哲学者とキリスト教徒との関係に焦点を当てたといえる、Edwards, Sorabji, Wattsらのものである。

まず、Dillonの第1論文は哲学者と世俗社会・政治活動との関係に焦点を当てる。プロティノスは都市ローマに住んでおり、彼のパトロンはローマの貴族層である。伝記にはガリエヌスの宮廷との関係も伝えられることから、プロティノスはある種社交界上の人物ともいえる。プロクロスもまたアテナイの都市政策に関与したと伝えられる。そしてイアンブリコスに関して、Dillonはリキニウスの宮廷との結び付きを主張する。皇帝であるユリアヌスの書簡集に混入したイアンブリコス宛書簡²⁾の作者を、Dillonはユリアヌスの母方の祖父ユリウス・ユリアヌスではないかと考え、イアンブリコスの学団とリキニウスの反キリスト教政権との結び付きを想定している (p.15 n.25)。イアンブリコスの文通相手が誰であれ、この人物がイアンブリコスの弟子であり、同時にリキニウスの宮廷に入っていたという可能性はあるようだ³⁾。彼ら哲学者は、本人が望むほどには社会や政治から遊離していないが、学団の中心人物は関与せずに、むしろイアンブリコスの弟子やプロクロスにとってのアルキアダスのように、その周囲の人物が実際に関与する傾向があるという。た

だし、哲学者の伝記と作者不明の書簡は史料として取り扱う上で問題があり、また史料としての性格が異なるように思われるが。

同様にイアンブリコスに関係するものがO'Mearaの第6論文である。彼は、後5世紀のヨハネス・ストバイオスの書に抜録された、ソパトロスから兄弟ヒメリオスに宛てられた書簡の作者を、イアンブリコスの弟子ソパトロスの同名の息子と同定し、イアンブリコスを中心とする新プラトン派が述べるところの統治者に関する倫理的思想を論じる。ソパトロスの書簡自体は、自分が統治する人々と自分が従属するより上位の権力者との間に挟まれた、中間的な立場にある官吏に宛てた指針である。

ブラウンも言うように、一般の人が哲学者に語ることを求めるのは、プロティノスの言うような一者との合一の教説ではなく、倫理的な行動の指針である。ストバイオス中には、総督に向けてそのような指針を説くイアンブリコスによる書簡も抜粋されている⁴⁾。そのいわゆるオカルト的・魔術的な傾向故に低く評価されがちな⁵⁾イアンブリコスでさえ、当時の哲学者像からそれほど隔たっていないという点は注目に値する。

論考の要約に戻る。第2論文、Lane Foxは、古代末期において哲学が人に与える影響と、哲学者が周囲から受ける影響とを描く。Lane Foxは、哲学によって人の一生や価値判断をも変えるほどのインパクトを与える者を'shaker'「揺さぶる者」と、そして、社会が矯正できないほどに誤った方向へ導かれた時そこを去るしかなくなった者を'mover'「立ち去る者」と名付ける。ただ前者に関して述べられているのはむしろ「揺さぶられた者」についてである。それは、アウグスティヌス、ネブリディウス、アンブロシウス、マンリウス・テオドルス、シュネシオスら当時の知識人であるが、本当に人生を変えるほどの揺さぶりを受けたといえるのはアウグスティヌスのみだったようだ。エリートとしての出自を背景に持つ者や、世俗的な出世を目指す者にとって、哲学者として観想の生を送ることは容易ではなかった。後者の「立ち去る者」として取り上げられるのは、キリスト教会がより拡張した時代に、アテナイを一年間離れなくてはならなくなったプロクロスと、アカデメイア閉鎖後にペルシアへ向かったダマスキオスら7人の哲学者たちである。

第7論文、van den Bergは、「隠れて生きよ (λάθε βιώσας)」というエピクロス派の格言に注目する。世俗エリートとしての背景を持つ多くの新プラトン主義者にとって、実践よりも観想を重視することは社会的緊張をもたらさずにはおかなかった。彼らはプラトンのデミウルゴスをモデルとし、自らは哲学的営為に携わり、代わりに周囲の人間を政治的活動に従事させるという方法をとったが、それ故に姿の見えにくい存在となり、彼らが嫌ったはずのエピクロス派と同じように、社会に寄与しない者だと思われてしまった。ユリアヌスやテミスティオスからも拒絶されたこのエピクロス派の文句は、後期新プラトン派からはエピクロスではなくピュタゴラス派に帰せられるようになり、否定的な意味を失っていった。

このピュタゴラス像を論ずるのがFowdenによる第9論文である。Fowdenは古代末期の

哲学者にとってモデルとなったピュタゴラスに焦点を当てる。ピュタゴラスやテュアナのアポロニオスが示す都市に対する態度は、普段は距離を置くが肝心な時には強力な存在感を示すというものとして描かれるが、実際にそのような行動を古代末期の哲学者が取ることは困難だった。古代末期には宗教的な哲学者としてのピュタゴラス像が発展し、異教祭儀の維持が困難になっていく中、プロクロスを最たる例として、哲学者と祭司とが結びついた。このような哲学者は、キリスト教会の勢力拡張とともに周縁に追いやられていくが、キリスト教徒側にとって異教の哲学者は、当時の史料に見られるように、嘲る必要があると感じられる程には意識された。

ここからは、ちょうど上述したような哲学者とキリスト教徒の関係を扱う、第二のグループの諸論文となる。Edwardsは第11論文の冒頭で、「ローマ帝国のキリスト教化」や「テオドシウス1世の法的措置による異教の消滅」といった考えは危険であり、実際には単純な線引きなどできないと述べる。それは間違いないのだが、なぜそれを論じるために、パノポリスの錬金術師ゾシモスと、ガザのマルナス神殿の破壊という二つの事例を引き合いに出すのか、そしてこの両者は比較対象として適切といえるのか、この点が評者である私には理解できなかった。

Sorabji、第12論文は新プラトン主義者アンモニオスの「裏切り」を取り上げる。後5世紀末、宗教紛争に揺れるアレクサンドリアで、哲学者が迫害を受ける中アンモニオスのみは追及を逃れた。Sorabjiが問題とするのは、ダマスキオスが非難する、この時アンモニオスがアレクサンドリア大司教と交わした同意とは何であるのかという点である。この同意とは、教説の内容に関わるものではなく、宗教行為に関わるもので、異教の祭儀への公然とした支持を控えることだったのではないかとSorabjiは述べる。

Wattsの第13論文は、ガザ司教アイネイアスとザカリアス・スコラスティコスという二人のキリスト教徒の著作から、5～6世紀アレクサンドリアにおける新プラトン主義哲学者像を考察する。アイネイアス『テオフラストス』に登場する新プラトン主義者は架空の人物であり、敬意をもって描かれている。一方、ザカリアス『アンモニオス』においては、実在の哲学者が無名のキリスト教徒によって論駁される。ザカリアスには、アレクサンドリアのような都市における新プラトン主義教師の影響力からキリスト教徒学生を守ろうという意図があり、そのようなキリスト教徒学生を読者に想定していたという。その新プラトン主義者への辛辣な描写は、逆に言えば、新プラトン主義者の強い影響力の反映でもある。

3

L.P.Gersonは既に公刊された本書への書評において、この論文集は基本的にピーター・ブラウンへのオマージュであり、論者たちは全く新しい見解を提示しているわけではないと指摘している⁶⁾。だがそれでも、超世俗的傾向が強いとされる新プラトン主義の哲学者

たちを、その周囲の世俗的社会（徐々にキリスト教的になりつつある社会）との関係という水準に引き寄せて論じようとした点で、この論文集は評価できると評者である私は考える。その思想内容が現世離脱的であっても、彼ら哲学者が住んでいたのは、禁欲主義者が目指した砂漠や荒野ではなく、周囲の人々と接する都市的な社会の内である。キリスト教会の拡張とともに異教徒の哲学者が周縁に追いやられていくことは事実だが、何人かの論者が描くように、その過程は興味深い反応と変化を含んでいる。その思想が同時代人の思想に大きな影響を与えたのなら、彼ら哲学者の世俗社会における姿にも関心を払うべきだろう。ただ、上で引用した箇所ではブラウンの提示する古代末期の哲学者像は、アンミアヌス・マルケリヌスの描く哲学者やテミスティオスの分析からも引き出されたもので、新プラトン主義の哲学者のみから引き出したものではなく、また新プラトン派の哲学者像に限定されたものでもない。ブラウンの研究をここで引き合いに出すことは、新プラトン主義哲学者の姿に別の観点から考察を加えることにつながる一方で、一部の箇所のみを特に引き合いに出す事は必ずしも適切な方法とはいえない。

次に、この書の特徴の一つは、主に依拠する史料の多くが哲学者による哲学者の伝記であるという点にある。この時代における哲学者の伝記としては、以下の4つがあげられる。1) ボルフュリオス『プロティノス伝』、2) サルディスのエウナピオス『哲学者・ソフィスト列伝』（厳密にはエウナピオスは哲学者ではない）、3) マリノス『プロクロス伝』、4) ダマスキオス『イシドロス伝』（『スーダ事典』が伝えるところでは『哲学史』）。これらの伝記には概ね、奇跡譚に類する叙述が看取され、また哲学者の歴史上の実像というよりも、むしろ作者にとっての理想を体現するモデルを描くことに重点が置かれている⁷⁾。無論、哲学者の理想像、哲学者のイメージの分析は、当時の社会において彼らがどのような存在として意識されていたかを知るために必要であるが、ではそのような理想像が必要だった理由は何なのか（はたしてキリスト教徒との対立が全てだろうか）、そしてそういった言説は何を引き起こすのか。史料上の制約があるとしても、この点における踏み込みが不足していて、物足りないように思われた。

また、この論文集では、主要な力点が新プラトン主義の哲学者に置かれているため、キリスト教会との距離を縮めていく統治者の側との関係も前面には出てこない。テミスティオスやエウナピオスの著作に出てくる哲学者にももっと目配りをすれば、バランスが取れたのではないだろうか。彼らのように政治の舞台へ接近することを選んだ哲学者たちは、思想史や哲学史においては魅力に乏しい存在だとしても、哲学者と社会の関係を考察する上では重要である。たとえ彼らが古代末期哲学者の「主流」から離れた「例外」的な存在であっても、「例外」に光を当てることはその逆にある「主流」を理解することになるだろうから。

このカンファレンスに参集した各研究者たちが提示した個々のテーマは、ここでは紹介できなかったものも含めて、一つの論文集に収めるには少々一貫性と相互の関連性を欠い

ているような印象は受ける。それでも古代末期社会の研究のためにこのような試みがなされることは重要であり、日本人によっても着手されることが望まれる。古典期アテナイのように哲学分野の研究と歴史学分野の研究が生産的に結び付くことは、古代末期においてはほとんど見られないように思われるからだ。アテナイという一つの都市国家内で完結する世界と、拡大しきった領土と皇帝という権力者を有する帝政ローマとでは、その背景に多大な相違があることは承知している。だがそれでも、哲学研究と歴史学研究との生産的な結び付きというものゝ土台古典期アテナイにおいてしか成立し得ないというのでない限りは、努力するべきではないだろうか。

注

- 1) P.Brown, *Power and Persuasion in Late Antiquity: Towards a Christian Empire*. Madison, 1992, pp.61-70.
- 2) W.C.WrightのLoeb版ではEpp.74-79.
- 3) T.D.Barnes, "A Correspondent of Iamblichus." *GRBS* 19 (1978) pp.99-106.
- 4) P.Brown, *op.cit.*, p.51.
- 5) 例えば、ピロストラトス／エウナピオス『哲学者・ソフィスト列伝』戸塚七郎・金子佳司訳、京都大学学術出版会、2001年所収の戸塚七郎による解説（401-2頁）。ここでのイアンブリコス評はやはり一方的かつ独断的すぎないだろうか。戸塚とは異なるイアンブリコス評については差し当たり以下を参照。F・ティンネフェルト『初期ビザンツ社会』弓削達訳（1984年）岩波書店285-6頁、堀江聡『『カルデア神託』と神働術』（新プラトン主義協会編『ネオプラトニカⅠ：新プラトン主義の影響史』（1998年）昭和堂 113頁）。
- 6) L.P.Gerson, "Review of: A.Smith (ed.), *The Philosopher and Society in Late Antiquity*." *The Classical Review* 56 (2006) pp.191-193.
- 7) R.T.Wallis, *Neoplatonism*. New York, 1972, p.8f.